

佐伯三十三観音巡り・佐伯Ⅱ

吉田 勝重

(会員 佐伯市女島)

第一番札所 大日寺不動堂

御詠歌 朝日かけ鶴の御城にかがやきて

曇なき世の春にあうてう



佐伯三十三カ所第

一番札所である大日寺不動堂のある大日寺は、慶長十三年（一六〇八）毛利高政公の願いを請け、藩内の武運長久、五穀豊穡、万民豊樂を祈願する寺院として秀乗律師により開基されている

という。

不動堂の建立年度は明確でないが「御領分中寺社記」には護摩堂として記載されている。

本尊は不動明王である。



本尊 不動明王

寺の沿革によると、佐伯藩御用日記に「幕末期の歴代藩主は、参勤交代にて出府する際、安全祈願のため必ずここに参詣していた。」という。

大日寺の末庵は、寺社記によると八社あったと云われている。上久部の東禅寺、白坪の三光院神宮寺、門前の阿弥陀堂、上岡の無量庵、啼干ひるほしの地藏庵、女島の地藏庵夏井浦の千眼庵、梶寄の大師庵があげられる。

大日寺略伝によると、開基の秀乗律師は讃州長曾我部

元親の三男、秀親（丸亀市沖の塩飽の小領主）が関ヶ原以後、世を捨て高野山に逃れて僧となり、名を秀乗と改むとある。

しかし、長曾我部元親の系図を繙くと、正室との間に四男四女があり、それぞれに長男弥三郎信親（戸次川合戦にて戦死）、二男五郎次郎親和（香川信景養子）、三男孫次郎親忠（津野定親養子）、四男右衛門太郎盛親（大阪夏の陣後刑死）との名が付けられている。また、小少将という女性（側室）に一男一女があり五男右近太夫、小宰相と名が付けられている。

元親の三男、津野孫次郎親忠は、津野氏を継いだ後、長曾我部盛親が家督を相続、父元親と不和になり慶長四年（一五九九）幽閉、九月殺害されている。

また、親忠は藤堂高虎と懇意であったという。大阪夏の陣後の刑罰により長曾我部家の直系は絶え、わずかに香曾我部家が幕末まで残る。

この事から秀乗律師は三男親忠でなく、同系列の長曾我部家あるいは香曾我部家のものではないかと思える。

この大日寺には、文政十一年の十一月十五日銘の棟木や毛利家十一代藩主、高泰の書が残されている。



文政11年11月15日の銘がある棟木と毛利高泰の書

また、寺内には「醜女菊姫物語」（大分の伝説）で有名な弁財天を祭る弁天堂がある。

菊姫は、佐伯藩家老の娘と云われ、非常に美しい姫であったが顔に吹き出ものができ醜くなったという。

娘の美しさを取り戻そうと、あちこちの医者を探ねるがはかばかしくなかった。菊姫はだんだんやせ衰えていった。そんな日が続いたある日、姫の部屋からお経を読む声が聞こえてくるようになった。

ある朝のこと、「一筋の光が横切り大日寺の弁財天にお祈りすればなおるであろう。」と言うお告げがあった。

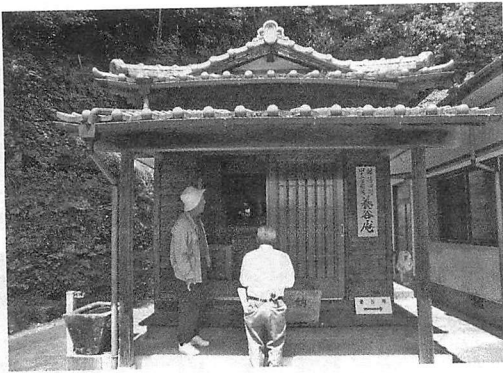


辨天堂の前には、「大乘妙典…」「一
千萬遍…」の文字と梵字が彫られ
ている古い石灯籠があった。



辨天堂と弁財天

菊姫は、大日寺に参り二十一日間の願掛けをし快癒した。
この話が城中に伝わり、町中の弁財天のご利益を受けて
美しくなりたいという娘達がお参りをしたという。
その弁財天が今も祭られている。



八迫の養谷庵に向かった。八迫は八戸と迫田の二つの
地区が合わさって

出来た地区である。

佐伯三十三観音

札所二十四番に八

戸村養谷庵（養谷

寺・養徳庵）とい

う寺が載っている。

現在ある養谷庵

は、別名観音庵浄土

宗潮谷寺の末庵で

ある。開山は不詳本

尊は観世音菩薩座

像である。

現在の養谷庵は、

第二十四番札所 養谷庵

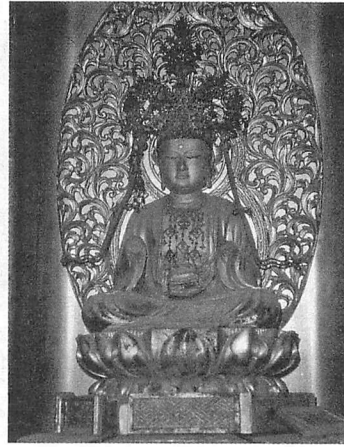
御詠歌

もろともに尋ねてもやと夕日影

片山里のりの下道

昭和二十八年に再建されたもので、以前の建物は、昭和二十六年のルース台風で倒壊した。

養谷庵の印判には「奉納經、本地佛觀世音菩薩 本尊大日如来 佐伯四国鶴岡村八戸 養谷庵」と書かれており、この庵が佐伯三十三観音二十四番札所かどうかは不明である。



養谷庵本尊 觀世音菩薩

庵の後方には、佐伯十二社の一つ、今熊野神社がある。佐伯十二社とは、明治十二年に大明神十二社として位置づけられている。他に祇園牛頭天王、白山権現、城八幡、寺田権現、大宮八幡、黒坪明神、星ノ宮明神、一野宮大明神、前高大明神、二ノ宮大明神、彦権現がある。

境内には六地藏の他に、「禪譽教道比丘」と書かれた住職の墓碑も残されていた。

第二十三番札所 正しょう覚かく庵あん 潮谷寺末庵

御詠歌 汲むとなお つきぬ流れの下の村
水上深き 誓いをぞ知る

国道二一七号線沿いの道路脇に正覚庵はある。佐伯四国三十九番札所でもある。

この地は昔ひじりやま聖山と呼ばれ、一人の聖が地元の人たちに読み書きを教えていた場所という。この聖の墓石があったが、国道拡張の為庵の前を削られ、現



在は若宮八幡のある所に移設保管されているという。
 明治五年、鶴岡小学校の前身として正覚庵は学校として使われていた。鶴岡小学校は同十九年藤原に移り鶴望簡易学校となり、同二十四年現在地に移り、鶴岡尋常小学校として改称したという。

正覚庵の御本尊は馬頭観音菩薩半跏像である。



珍しい馬頭観音像

庵の入り口には、元禄十四年の銘が刻まれた花崗岩製の地藏菩薩と石幢六地藏が残されている。

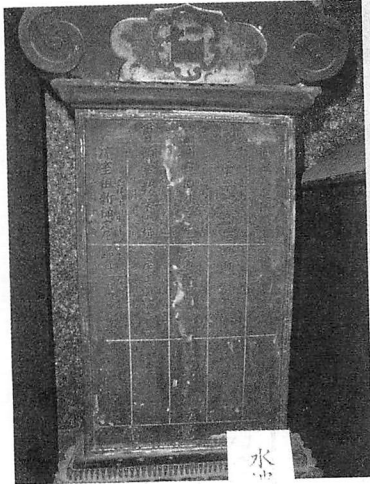
また、この地は佐伯史談会発祥の地でもあるという。

佐伯藩主、毛利高政が鶴谷城の建設の際、ここに仮屋をつくり工事の様子を見守ったという説もある。

堂内には、他に「水波賣大神川並安全祈攸」と書かれた札や十五名の名が載る木製の位牌がある。



元禄十四年の銘がある地藏菩薩



寛永・元禄・宝永に至る十五名の各霊位の位牌

第二十二番札所 龍護寺

御詠歌 世も救ふのりの響きも ことぶきも
末 ながわきと祈る龍護寺



佐伯四国第三十
五番札所龍護寺の
左手に観音堂があ
る。

開山は正治年中

(一一九九〜一二〇〇)

○山本源太有明が
創建したと言われ
ている。本尊は千手
観音菩薩立像であ
る。豊後國豊後霊場
第十二番にも記載
されており、本尊は
十一面観音像とな
っている。

千手観世音略記には、次のように記している。

御當寺本尊千手観世音菩薩ハ法橋定朝ノ作ニシテ慈悲
忍辱ノ尊容ナリ其傳ハ往昔大神朝臣佐伯惟義ノ家臣山本
源太有明ト言シ人惟義遊去ノ後出家シテ俗名ヲ其俣有明
法師ト號シ此處ニ草庵ヲ結ヒ朝暮觀世音ヲ信スト雖モ過
去ノ宿業ニヤ終ニ盲目ト成リ然モ信心益堅固ニシテ齡七
十ノ春ノ頃暫クマトロム夢之中ニ慧日破諸暗ノ唱文何ソ
空シカラシヤト御告ヲ蒙リ川ノ行ケレハ一鳥飛来テ翅ヲ
以テ有明兩眼ヲ摩ケレバ忽眼明ニナリヌ時々水中ヨリ千
手観世音ノ尊像現ハレ玉フ是レヲ取上歸リ草庵ニ安置シ



本尊 千手観音菩薩立像

頂礼供敬退轉ナシ後ニ當國兵乱ノ時大士之像モ土中ニ埋レ終ニ二十余年ヲ経テ貴僧来リ有明ノ住スル菴ノ部ヲ見ニ夜々光明ヲ現シ給ノ常ニ青龍幡ひろかえツテ其地ヲ守護ス怪ヲモヒ土中ヲ掘レハ觀世音ノ尊像アリ是レ正シク有明ノ安置シ給フ尊像ニ疑ヒナシト則チ一字ヲ建立シ羽明山龍護寺ト号ス其後當國梅牟礼ノ城主佐伯惟治ト言人アリ有時此寺ニ参詣シ一之願望成世サルヲ憤リ忽チ寺ヲ打コボチ尊像ヲ自ラ推出汝シ佛心アラハレ川上ニ沂ルベシトテ水中ニ抛入シケレバ噫不思議ナル哉漲水ヲ沂ケル惟治驚入既ニ尊像ヲ元ノ如クニ安置シ前非ヲ懺悔シ礼拝恭敬シ給フ後佐伯候毛利安房守觀音ヲ深ク信シ玉ヒ長臣西名乘原等ニ命シテ寺ヲ立鑄鐘ヲ鑄サセ領地ヲ寄附シテ武運永久ヲ禱ルノ道場ト定メ玉フ救世ノ利益疑ヒ有ルベカラス委キ事跡ハ本記ニアラワシ寶殿ニ納置然リト雖モ四方之信者ニ此靈意ヲ為令知國語ヲ表シテ前々共大略ヲ舉ルノミ佐伯高政公御代々御祈願所ナリ

龍護禪寺第二世住職

明治三十二年 亥春

羽 明 道 貫

(大分県社寺名勝図録より)

この龍護寺は、大永四年(一五〇四)佐伯惟治により再

興され佐伯氏の菩提寺となった。

大永七年、梅牟礼城落城の際、佐伯惟治主従はこの觀音堂を仮寝の一夜となし「枯れてだに咲くべき花の種子あらば 拾わせ給へ落つるこの実を」と詠み三河内さして落ちていった。

堂内には佐伯氏の位牌が安置されている。毛利藩家老戸倉六郎右衛門が寄進した愛染明王像もある。



また、境内の一角には、天正六年(一五七八)十二月の島津大友の戦い(豊薩戦争・高城の戦い)にて戦死した佐伯氏十三代佐伯惟真の墓がある。(天正七季己卯七月十二日記、戒名・况館東兵宗勲大禪定門と彫刻)

第二十一番札所 東禅寺供養堂

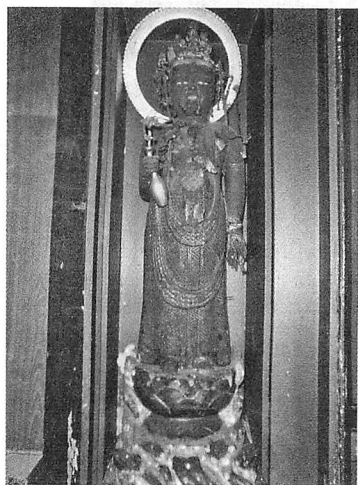
御詠歌 父母も我が身もともに観世音

導き給え 花のうてなに



この東禅寺供養堂は佐伯四国三十三番札所でもあり、観音堂権現様、地藏堂とも言われている。開山は寛政四年（一七九二）と伝えられている。本尊は地藏菩薩であるが脇佛として十一面観世音菩薩立像がある。

境内地の造成は江戸時代中期と言



東禅寺 十一面観世音菩薩

毛利高政の母、法雲院（寛政四年歿）は遺言により、鶴谷城の見える場、久部の地に埋葬されていた。場所は砂防堰堤の上で石地藏が建っていたと言う。

現在、墓地は養賢寺に移設されている。

お堂の中には仏具や仏画などもあった。

東禅寺境内には、この他に延命地藏、宝篋印塔、本堂建国記念碑、建設現場における殉職者を祀った聖観音像や歴代住職墓塔塔等がある。



東禪寺の参拝を終え、私たちは久部地区にある海軍少尉、伊東宣夫鎮魂歌碑をお参りした。

伊東宣夫氏は今次大戦中、国分第二基地より出撃した神風第二正統隊（九十九式艦上爆撃機）の一員として沖縄攻撃に参加戦死している。

その時の様子や親の気持ち、願いが筑前琵琶の大師範熊手旭辰氏作詞作曲の曲として歌碑に記されていた。

平成十一年建立のものであるがその碑文を紹介する。

あゝ海軍特別攻撃隊伊東宣夫鎮魂歌

逝く春に逢はで
若り行く若桜御国
の為ぞ心は樂し。

十三塚原慰靈碑に
春は廻りて咲き競
う、花は宣夫が今こ
こに生まれ変りし
姿かと在りしその
日の面影を千本桜
に偲ぶなり。

三千とせの、歴史守りて捨つる身の、命は軽しいざ行き
て、祖国の幸を守らんと伊東宣夫が雄々しくも 轟音残
して飛びたちし特攻第二回分基地、時しも昭和二十年弥
生の風吹き荒れて、ますます募る危機感に特攻戦略拡大
し、凄絶過酷な運命は佐伯に生まれて十有七、春秋かけて
文学を誇る君にも襲い来る、四月二十八日夕まぐれ、一機
続いてまた一機、滑走すませ南海へ、我が身を捨てて敵艦
に、突入めざす死の飛行。

沖繩上空に着きければ敵の包囲と要撃の、激しきさ中
くぐり抜け、甲板めがけて迫りゆくその攻撃のすさまじ
さ、交戦奮激ややしはし、やがて「ワレットツニューウス、テ
ンノウヘイカバンザイ」一電文を最後とし、見事敵艦体当
たり、悲壯の戦死を遂げたりけり。

死生命あり論ずるに足らず 鞠躬唯応に至尊に酬ゆべ
し、奮躍難に赴いて死を辞せず、慷慨義に就く日本魂。

ああなつかしいわたしたちの宣夫よ、思えばあなたと
の親子最後の別れの日、あの茨城へ旅立ちの凍てつく夜
中の門司駅の、プラットホームで凜々しくも「行きます」
のただひとこと、見えなくなるまであなたが振った白い
手袋よ。

あなたの乗ったその名も九九艦爆の、座席一面を埋め
ていた遅咲きの桜の花よ、そして胸のポケットには母の
写真がしっかりと抱かれていたと云う。

御国の為に喜んで名譽の極みといながら、きついつ
らさのこの思い、思えば猛き子も親もいつか血を吐く不
如帰、されど尊き心根はみごと報われ幾星霜、天晴れ若き
勇士らが護りし國は永久に、平和と共に栄えゆく、この世
の春を君知るや。

ああ思いは深し十三塚、み霊よ永遠に安かれと、香華も
絶えぬ慰霊碑に、詣でる毎の春秋に、涙ながらに口ずさ
む、君に手向けの鎮魂歌。そよ風舞う桜のはなびらにかつ
ての君の笑顔がある、黄菊白菊かおる秋の日差しにあな
たの囁きが聞こえる

護国に殉じ昇進し、海軍少尉と祀られしいとき宣夫
のその最後、語り伝えてわが家に行末長く残すなり、琵琶
の調べに歌うなり。

特攻に行き若き命を散らした人々が多くいる。陸軍八
十一振武隊の白石哲夫氏（灘出身、史談一八一号記載）も
その一人である。語り伝えていかなければならない。